

# 家庭科への評価からみる家庭科教育の課題

——中学教員調査から——

室 雅 子\*

The Problem of Home Economics Education in Junior High School  
about Teachers and Others' View of Home Economics  
—From Junior High School H. E. Teachers' Opinion—

Masako MURO

## I はじめに

家庭科は、男女別学から共修になるなど様々な変化を遂げながら内容的にも進化し、現在は新しい学習指導要領のもとに新しいスタイルでの家庭科が行なわれている。しかし、実際には、単位数縮小や教員の削減など後退的な現状も起こっている。家庭科教員自身には、日頃本人の立場や家庭科担当としての立場からでは言えない、家庭科への評価に関わる問題を抱えているという声もよく聞かれる。この現象は新しい学習指導要領に変わったために起こった現象ではなかった。本研究では、新学習指導要領に変わる前の旧課程での家庭科への評価の実態を振り返り、旧課程時代にすでに見られていた問題点と、現在実施されている新学習指導要領にどう対応し、改善していけるか、また大学として補うとよいと思われる点を考察することを目的とする。

## II 家庭科への評価に対する既存の研究

家庭科への評価に対する既存の研究のキーワードとして「家庭科観」がある。誰の家庭科観かによって研究がわかるが、大きく分けると「生徒」「親」「他教科教員」の3側面に分類される。

### 1. 生徒の家庭科観

家庭科に対して肯定的かつ積極的な報告としては、久保（1993）の大分県内中学生調査では「『男は外、女は家庭』という伝統的な性別役割分担の考え方に対して、否定的な考えを持つものが多かった」「男女ともに家庭科は必要な教科だと認めているものが多く、

---

\* 生活科学部 生活環境デザイン学科

家庭科への積極的な姿勢がうかがえる」といった報告があるが、他はそれほど肯定的ではない。

柳（1993）は、福岡県内の中学生調査から、性別では女子のほうが家庭科に対してプラス（面白い、ためになる）の評価をするものが多いこと、学年では高学年になるほどマイナス評価（面倒だ、気楽だ）が増加する傾向がみられることを報告し、あまり重要視されていない家庭科像を示している。鶴田・荒井（1996）は6都府県高校生調査の「男女ともに伝統的な教科観を持っている生徒がやや多く、男子は家庭科を男女ともに学ぶことに關して、また生活とつながる学習であることを実感していない」といった報告をしている。これら既存研究にみられるように、家庭科自体を否定はしないが、全体としてはまだ家庭科教員が望むほどの家庭科観、家庭科像までには距離があるといえる。

## 2. 親の家庭科観

柳（1993）は、先の調査で「家の人はどの教科の成績を気にしているか」も尋ねている。音楽、体育、家庭、美術は1年次から関心が低く、3年になるとさらに低下することを報告しており、家庭科があまり親から重要視されていないことを示している。

入江・永原（1996）は、父母と教員による家庭科観の比較（1994年実施）を行い、過半数以上の父母・教員は家庭科を重要と考えてはいるものの、中・高教員＞小学校教員・父母＞中・高父母の順で重要視度が少なくなることを報告している。教員、とくに専門教科担当の教員は重要視しているが、親はそれほどでもなく、特に受験が激しくなる中高にしたがって意識が低くなっていく現実を示している。

それでも、永原・入江・小川（1997）が、1987年に行なった父母の家庭科観調査を先の1994年実施調査と比較したところ、家庭科を支持する親は大幅に増えており、特に高校生の親に指示されていたことから、教科に対する理解は一応深まりつつあると結論付けており、進歩の傾向はあるといえる。

## 3. 教員の家庭科観

家庭科教員自身は、家庭科を重要な科目であると認識している場合が多い。入江・永原（1996）の山口県内調査から、男性教員の約8割、女性教員の約9割が「（家庭科を）重要な教科だと思う」とした結果が報告されている。また、鎌田（1999）の小学校家庭科教員対象調査では、家庭科教育は条件さえそろえば、もっと充実・発展する教科であると考えられていることを示しており、教科存在意義を認めている傾向が報告されている。

しかし、鶴田・荒井・原澤（1998）が家庭科教員のみではなく家庭科外教員も含めた調査を全国9都道府県の高校で行なったところ、「家庭科が生活と直結する教科であると生徒が理解しているか否か」について、家庭科教員は男女ともに理解していると評価するのに対し、科外担当者は理解していないと評価する厳しい面を指摘し、家庭科以外の教科の教員には家庭科の中身や意義があまり伝わっていないことから、校内外での家庭科への理解を求める意識的な活動の必要性があることを今後の課題として提示している。

以上のように、家庭科観に関しての3側面の既存研究があるが、家庭科教員が家庭科教員として勤務するにあたって、または授業するにあたって、日頃周りから家庭科はどう思

われていると感じているかを問うたものは少ない。現場の声としては、もっと悲観的な、しかも個人ではどうしようもない問題が聞かれるときがある。家庭科の向上とともに、教員のおかれる立場改善や熱意へ維持のためにも、この実態を明らかにすることも重要であると考えられる。つまり「家庭科は軽視されていないか」ということを明らかにすることだ。この問題は家政学全般にもかかる問題でもあり、今回98年調査の未分析であったこの問題を取り上げることは、家庭科のおかれた状況の改善に対し、意義があると考えられる。

### III 調査概要

本研究では、日本家政学会家政教育研究会（現：家政教育部会）実施の「家政教育に関する調査」（1998）のデータ分析を行なった。調査の概要は以下の通りである。

#### 1. 目的

本調査は家庭科教員の意見から、大学における家政教育の改善点を探る目的で実施されたものの一部である。本研究に関する部分としては、現在行なっている授業や所属している学校について、家庭科がどのような評価を受けていると教員が感じているか、改善点としては何を日頃感じているか、について明らかにする目的で行なわれた。

#### 2. 方法

無記名自記式質問紙調査。郵送法（回収率50.5%）

#### 3. 対象・時期

全国公立中学校の一覧より無作為抽出した中学校勤務の家庭科教員285名。  
1998年6～7月。有効回答数144。

#### 4. 対象者の属性

性別：女性139名（無回答5名）

年齢：平均年齢層……36歳～40歳代

最頻層……41～45歳（21.7%）

#### 5. 内容

家庭科の評価、家庭科への生徒の態度・意欲、改善点結果の予測

- ① 家庭科教員は、他科の教員よりも教科として軽く見られているのではないか。その理由としては、受験教科にないことと、女性の科目として見られているなどが挙げられるのではないか。
- ② 家庭科は生徒からも教科として軽く見られていると教員が感じているのではないか。
- ③ ①②には家庭科教員の努力だけでは解決できない問題が潜んでいるのではないか。
- ④ 社会全体のジェンダー意識が、間接的に家庭科への評価に影響を及ぼしているの

はないか。

## IV 結 果

### 1. 家庭科の評価

「家庭科は他の教科と同等に扱われていますか。それとも軽んじられていると感じますか。」という質問を行なったところ、表1のように意見が分かれた。結果は、「軽んじられている」と回答した者は同等であるとした者の1.5倍であった。結果の予測①と照らし合わせてみると、もっと軽んじられていると感じている人が多いのではないかと推測されたのだが、同等であるという回答が予想以上に見られた。ただし、同じ「軽んじられている」と回答した者の理由（自由記述）を分析すると、軽んじている者として、他科教員や学校内の教員を想定している者だけではなく、生徒の教科評価として捉えている者も混在している。

表1 家庭科に対する軽視の有無

同等である	軽んじられている	無回答・その他
37.5%	58.3%	4.2%

この「軽んじられている」と回答した者には理由を記述してもらったが、その結果は表2にまとめた。（自由回答文に複数の要因を記述したものは、それぞれを分けてカウント・表記した。）

自由記述の内容文はできる限り尊重したが、内容的に同じものは同項目としてまとめた。その結果、「受験の影響」に関するもの、「校内の運営上の処遇」に関するもの、「授業数の削減や少なさ」に関するもの、「家庭科の担当者に問題がある」もの、「専門性への誤解」に関するもの、「(校内ではなく)社会的な問題」に関するもの、「副教科意識」、「その他」の8つに大別された。

#### (1) 受験の影響

受験の影響は、誰もが容易に想像する要因であるといえよう。教員、親、生徒と内容上表での欄を分けて表したが、三者を合計すれば「軽んじられている」と回答した教員のうち59名は受験の影響をあげていることになる。具体的には「受験科目にない」から、家庭科に力を入れない、主要5教科でないという意識を感じる、という科目間の差別・区別を理由とするものであった。これは長年言われ続けてきた受験による弊害であり、受験必須科目にならない限り解決しない問題であると思われる。中学や高校も、何校に何名進学させたかが学校や教員の力量を測る“ものさし”とされている現状がある以上、家庭科のみでの改善は難しいだろう。

ただし、「入試にないため、生徒の学習への気持ちは軽く思われているが、その分、教師の自由裁量は増えてありがたい」という意見に見られるように、受験が絡むと“教科自体の意義や面白さ”よりも“得点できる指導”が重視されることから、受験科目外であることを肯定的に見る意見が見られたことは興味深い。また、「息抜き」という言葉も見られるが、この「息抜き」という言葉も、本調査の表記からはわからないが、教員によって

家庭科への評価からみる家庭科教育の課題

表2 家庭科への軽視の理由

大分類	中分類	内容	回答数
受験	教員・親	親も他の教師も受験にないから軽んじている	3
	教員・親・生徒	高校入試にないから／受験教科でないという意識を感じる	31
	生徒	生徒の間で主要5教科と扱いが違っているように感じるが、教師間にはない	2
		入試教科／主要教科ではないから（生徒）／入試科目でないからとボーっとしている子がいる	5
		5教科偏重である	3
		入試にないため生徒の学習への気持ちは軽く思われているが、その分教師の自由裁量は増えてありがたい	1
		入試教科にないから息抜きになっていると思う	1
		一部の生徒は受験科目外という意識があるが、生きるために必要な教科だと実感する生徒も多い	1
		受験教科ではないので、（生徒が）苦手・わからないことの克服はあまり力を入れていない	1
	教員	高校の家庭科関係へ進む生徒のレベルが低い	1
運営	教科理解	時間割の製作で、教職員が準備や片付けを理解してくれない	1
		周りの教員の理解不足	1
		地域性（土地柄）を感じる	1
		中学では特に思わないが、小学校については大変軽視されている（例：土曜に時間割が入っている、実習が単に楽しみだけになっている）	1
	人員	学校行事に文化祭の展示以外少ないので、認識がない	1
		実習を伴うにもかかわらず助手がない	1
		実習を伴う教科を40人学級で受け持っていること。半数にしてほしい	1
	予算	人員配置が少ない／大規模校でも1人である	3
		予算配分が教員の頭数に比例するので配分が少ない	2
		理科と同じように器具・備品が必要なのに整えられていない	1
社会		98年度の市からの消耗品予算が、理科は増額なのに家庭科は減額された	1
		校内では同等だが、県全体では軽い	1
		校内では同等だが、生徒と保護者には5教科と差がある	1
		校内ではないが、社会的にあると思う	1
授業数の少なさ／削減		生活を重視する暮らしでないから	1
		授業数が少ないから／授業数で下限をとっている	3
		文部省の姿勢そのもの（口では「重要」といいながら予算・時間数は削減する一方）	1
		年間授業のカット数からみて	1
担当者問題 専門外担当	家庭科外担当	授業時間数が少ない／少なくなってきた	3
	力量不足	家庭科の免許を持っても他の教科を担当する率が高い	1
	非常勤担当	エキスパートの知識不足	1
	他教科教員	講師であっている学校が多い／小規模校では臨時免許または講師で専門の教師が少ない	1
専門性の誤解	学習内容の誤解・軽視	家庭科は5教科の先生で補充するようだ	1
		教員数が不足しており、免許のない先生が担当しているケースが多い。内容もしっかり押さえていない	6
		主婦の（お母さんの）やっている勉強だと思われていること	1
		教師側から見て、誰でも教えられると考えている人がいる	4
		学問だという意識がない。特に教師などの間で	1
		親や生徒の意識として本来の意義が理解されていない（入試に不要だから）	1
		大切だといいながら、なんでもお金で済ませることができると考える者が多い	1
		男女共学になってから同等に近いが、「家庭科」という名前から、「裁縫・調理」というイメージが強い	4
		強い内容、内容をわかってもらえない	
		家庭でやればいいと考えている	1
	ジェンダー	主婦なら誰でもできることだという認識があるため専門的な学問として捉えることができないのかもしれない	1
		理論のない教科だと思われている	1
		ものづくり的意識が保護者、生徒、同僚からの発言で強く感じる	2
		今の学習内容が理解されていない	1
		学ぶより遊んでいると思っている人がいる	1
		生徒の中に男子は必要ないと考える子どもがいる	1
「副教科」意識	全体	最近減ってきたが、家庭科、家事は女がするものという考え方	1
	教員・親	親や現職の教師で履修していない人がいるため、周りに男子はしなくても良いという風潮が残っている	1
	生徒・親	「副教科」という言い方をされたときに（軽んじられていると）強く感じる	1
		教師や親から軽い教科と思われている。生徒はあまり区別していない	1
その他		生徒や保護者の意識として「副教科」という感じ方が強い	2
		技家の免許（←2教科の免許が1つ扱いであることか？）	1
		意識の問題だと思う	1
		一部の生徒が実習時に遅れたり不参加だったりするから	1

は「得点獲得に走らず生徒が自然体で教科に向き合える」ととらえる者もあり、教員の気持ちの持ち方や考え方によっては、受験下における家庭科の工夫の余地があることを示しているだろう。

## (2) 運営上の処遇の問題

運営に分類した記述では、家庭科以外担当教員の家庭科（および家庭科の授業内容実態）への理解・認識不足とそれに伴う問題（家庭科教員が少ない、助手がいない、時間割の不具合、予算の削減）が指摘された。

先の既存研究でも家庭科外教員の理解不足の報告があったが、家庭科教員が少ない人数で四苦八苦して授業を回しているにもかかわらず、相応の人的・物的資源が与えられていない現状がうかがえる。

この問題は、「授業数が少ない」「免許のない教員が担当するケース多い」などの「担当者問題」や「専門性への誤解」にも連動している。

## (3) 授業数の削減や少なさの問題

(2)で明らかになった家庭科の処遇の要因のひとつに、この授業数の削減、もしくは授業数が少ないことがあげられる。授業数が減らされたからこそ、少ないからこそ、人が少ないのであり、予算もつかないのであるが、授業内容として人的・物的資源が少ないことは内容の低下につながる可能性は否めない。

現状（新学習指導要領下）を将来像として見れば、後に高校の家庭科は各科目4単位であったのが、2単位の科目が新設され、2単位科目が多く为学校で採用される。今まで4単位を守ってきた学校でも3単位になったりと、さらに単位減の傾向が現れることとなる。家庭科としては改善されるどころか縮小に向かうのである。

## (4) 担当者問題

綿引ら（2002）は中学校家庭科担当教員を対象とした12都道府県調査において、家庭科担当教員を対象者にしたにもかかわらず、家庭科の免許状を持たない教員が年代に関係なく18.9%存在し、とくに家庭科担当歴5年以下の者が44.8%を占めたことを報告している。本調査でも表2に示したように、「教員数が不足しており、免許のない先生が担当しているケースが多い／内容もしっかり押えていない」という指摘が6名からなされている。新卒・既卒の教員採用は狭き門だといわれて久しいが、家庭科の正規の免許を持っている者が担当する場が持てず、免許のないものが家庭科として授業を展開している現状が明らかとなった。また、逆の「家庭科の免許を持っていたても他の教科を担当する率が高い」現状も同時にあることはおかしな現象である。これらの結果からして、「家庭科の専門性」の重要度が軽視され、設置者側に、家庭科は免許を持った専門家によって授業を行なわれるべきであるという意識が低いことが伺える。

## (5) 専門性の誤解

2003～4年日本家政学会家政教育部会・部会報告および学会報告「家政学の社会貢献」でも家政学全体の社会的な貢献や、認知の広範化の必要性が問題にされているが、家庭科や家政学という学問の中身を誤解されている、または認識されていないことによる弊害が家庭科への軽視という形でみられる。

「専門性の誤解」に分類した項目の多くは、「家庭科＝裁縫・調理、家事、主婦、女の学問＝専門的な学問でない」という意識が表れたものである。このために家庭科（家政学も



含まれる)が学問としてみなされていない、教員が学校で教える内容ではないという誤解を生んでいる。

少しでも家庭科教育に携わったことのある者なら、家庭科の内容は、家庭科未履修者の一般人が日常で教えられるようなレベルばかりではなく、科学的・系統的な内容であることを理解している。既存研究でも、家庭科内容への誤解は指摘されてきたが、本調査での記述「親や現職の教師で履修していない人がいるため、周りに男子は(家庭科を)しなくても良いという風潮が残っている」にも表されるとおり、一般社会のみならず、教員の中でも、家庭科をまったく誤解しているものがあることが指摘された。

これは、家庭科の変遷上大きな問題であった、男女別学、女子のみ教科であった時代の男性の問題であろう。また、前述の「(家庭科の母体である)家政学が社会にどのような学問であるのかを広めていく必要性」を述べているのと同様、家庭科も内容を正確に認識してもらう行動を起こす必要がある。「運営」に分類した、「学校行事に文化祭の展示以外少ないので認識がない」という記述にも見られるように、ものづくり面以外の家庭科の側面を他教科教員や親などに知ってもらう機会が必要である。

(6) 「(校内ではなく)社会的な問題」に関するもの

(5)で浮上した問題は校内ばかりではないことが、「社会的な問題」に分類された記述でわかる。校内では同等だが、県や市、社会レベルで軽視されていると感ずることがあるようだ。つまり、回答者の校内では、教員の家庭科への理解がなされているが、それ以外の広範囲になると家庭科への理解が感じられない、ということである。原因としては、(5)に記した家庭科未履修世代の男性が行政運営者に世代的に多いことや、いわゆる社会に存在するジェンダーバイアスのためと考えられる。「生活を重視する暮らしでない」という意見は、家庭科の意義と逆行するものであるが、この感情を生徒や社会に感じながら理解を求める家庭科の授業は大変なものであらうと推察される。

(7) 副教科意識

「副教科」というこの「副」という言葉が、「＝重要でない、付属物」というイメージを生んでいる。教科の位置づけとして家庭科が副教科になることに対する不満とも捉えられるが、この言葉を使うことによる軽視の助長も否めない。

(8) その他

これまでの分類でどれにも属せないものを、「その他」としたが、ここでは「技・家の免許」という記述に着目したい。

回答者の真意はこの言葉だけではつかみきれないが、既存研究では「技術科」と「家庭科」という2つの別の免許が1つの科目で共存していることの問題点を指摘している。高木ら(1999)は、「家庭科領域が技術科領域に圧迫されている」、「総時間数も領域も必ずしも均等に二分されているわけではなく、1教科のなかに2つの小教科が相互に押し合いながら存在している」とし、「制度と実際に齟齬をきたしている」と指摘している。堀内ら(2000)も「『技術・家庭』の教科構造が内包する矛盾」点として、中学校教員対象調査結果をもとに同様の指摘をしており、のちに綿引ら(2002)も一教科であることを家庭科免許所有者が強く感じていることを報告しており、この問題は、現状でも、学会でも未だ解決も改善への着手もされていない問題である。

## V ま と め

本研究では、旧学習指導要領下における中学校家庭科教員を対象とした調査より、家庭科教員から見た家庭科の評価について、実態の把握とその問題点を探った。

既存研究では、生徒・親・教員自身において家庭科という教科の存在意義は認められているものの、あまり重要視されていない様子が報告されていたが、本研究では、平等イメージのある中学校教育現場において、家庭科が軽視されていると感じているものが、同等であると感じている者よりも1.5倍もいることが明らかとなった。

軽視される理由としては、「受験の影響」に関するもの、「校内の運営上の処遇」に関するもの、「授業数の削減や少なさ」に関するもの、「家庭科の担当者に問題がある」もの、「専門性への誤解」に関するもの、「(校内ではなく)社会的な問題」に関するもの、「副教科意識」、「その他」の8つに大別されたが、どの分類も独立ではなく相互に関連・影響しあって家庭科への軽視を生み出していることが明らかとなった。家庭科という教科の内容への正しい認識が、社会全体だけではなく校内の教員にまでもされていないことが、家庭科の評価の低下につながり、運営上・授業時数等諸方面の家庭科関連の削減につながっていたといえる。

今後の課題としては、次のように考えられる。まず、この実態の改善は各学校に1人または数人しかいない家庭科教員だけで対処する問題ではなく、家政系大学や家政学会が主体的にもっと家政学および家庭科教育の研究対象や教育内容を世間一般に正しく認識させるための活動を行なうべきである。中学、高校の文化祭や大学での市民講座などではどうしても会の盛況を願い、ものづくり体験や製作物展示に終始してしまう場合もあるかと思われるが、家政学会家政教育部会が取り上げているように、もっと家政学や家庭科教育に関わる教員が、世の中一般の学問的解説の場で専門家として意見を述べる姿をみせ、家庭科や家政学の専門性・科学性をアピールする必要があるだろう。

一見、受験科目に家庭科を加えることが家庭科に注目し重要視度を高めるように思われがちであるが、受験用の学習は本来家庭科が目指す身につけさせたい力や姿勢とは相容れない。ゆえに受験科目でないことを嘆くのではなく、受験科目でないからこそできる家庭科の必要性が伝わる授業を作り、その家庭科履修者が行政運営者や一般社会人として育つことが、今後の家庭科の存在につながると考えられる。大学の家政教育は家庭科の意義を正しく理解し主張できる教員を養成することがより一層必要となるだろう。

また、そのように教員を養成して家庭科免許取得者を増やしても、免許外教員が家庭科をやっているようでは改善は望めない。一度雇用した教員を解雇するのは難しいだろうが、社会全体として専門家の免許の有無は問題とされているところでもある。教育界も一人ひとりの教員の声として免許取得者の人数的採用・補充を訴えることだけでなく、行政的に、当該教科には当該免許を持つ者をあてるといった改善要求も必要であろう。

最後に、本調査にご協力いただいた全国中学校家庭科教員の皆さん、調査作成及び研究チームであった元大妻女子大学高部和子氏、青山学院短期大学（非常勤）飯塚和子氏には、厚く御礼申し上げる。なお本調査の全体およびメイン項目の報告は第1、2報として日本家政学会大会（1999：名城大学）にて、第3報として日本家政学会大会（2004：京都



国際会館）で行なわれた。今後家政学会誌にて詳細を報告予定である。

### 引用・参考文献

- 久保加津代（1993）「男女共学の家庭科の授業にみる学習効果——大分県・中学生の場合——（第1報）——家庭生活観・家庭科観——『日本家庭科教育学会誌』第36巻第3号 pp. 1-6
- 柳昌子（1993）「性別役割および家庭科に対する生徒の意識（第1報）——性別と学年別を中心に——『日本家庭科教育学会誌』第36巻第1号 pp. 1-8
- 鶴田敦子，荒井紀子（1996）「男女共学家庭科の履修と高校生の意識（第2報）——生活主権者意識と家庭科観——」『日本家庭科教育学会誌』第39巻第2号 pp. 47-53
- 鎌田浩子（1999）「小学校家庭科教育の担当者の家庭科観と指導の実態」『日本家庭科教育学会誌』第42巻第1号 pp. 1-8
- 鶴田敦子，荒井紀子，原澤智子（1998）「男女共学家庭科の実施と教師の意識（第1報）——ジェンダー観をめぐって——『日本家庭科教育学会誌』第41巻第2号 pp. 33-40
- 鶴田敦子，荒井紀子，原澤智子（1998）「男女共学家庭科の実施と教師の意識（第2報）——生活主権者意識と家庭科間をめぐって——『日本家庭科教育学会誌』第41巻第2号 pp. 41-48
- 小川裕子，山田次郎（1990）「父母の家庭科観——山口県の小・中・高校生の父母の場合——」『日本家庭科教育学会誌』第33巻第1号 pp. 15-22
- 入江和夫，永原朗子（1996）「教師の家庭科観——山口県の小・中高校教師の場合——」『日本家庭科教育学会誌』第39巻第3号 pp. 7-12
- 永原朗子，入江和夫（1996）「父母の家庭科観（第1報）——学習指導要領改定後における山口県の小・中・高校生の父母の場合——」『日本家庭科教育学会誌』第39巻第3号 pp. 21-28
- 永原朗子，入江和夫，小川裕子（1997）「父母の家庭科観（第2報）——学習指導要領改定前後の調査を通して——『日本家庭科教育学会誌』第40巻第2号 pp. 1-8
- 上里，小島，高木，今野，堀内，福留，綿引，鶴田（1999）「12の都道府県調査からみる中学校家庭科教育の実施状況(1)——家庭科教員の実態——」『日本家庭科教育学会誌』第42巻第2号 pp. 17-22
- 高木，今野，綿引，堀内，福留，小島，上里，鶴田（1999）「12の都道府県調査からみる中学校家庭科教育の実施状況(2)——実施状況及び県別比較——」『日本家庭科教育学会誌』第42巻第2号 pp. 23-30
- 堀内，高木，鶴田，綿引，福留，小島，上里，今野（2000）「『技術・家庭』担当教員のとらえる教科構造上の問題点」『日本家庭科教育学会誌』第43巻第2号 pp. 81-88
- 綿引，鶴田，福留，堀内，上里，高木，今野，小島（2002）「中学校家庭科教員の実態と家庭科の指導に関する意識の関連——指導計画及び指導観——」『日本家庭科教育学会誌』第45巻第2号 pp. 141-151